

深沢克己編著

『国際商業』（近代ヨーロッパの探求⑨）

中 澤 勝 三

本書は、12名（編者による序章と11名によって書かれた11章からなる）による著作であり、「シリーズ・近代ヨーロッパの探求」の第9巻として出版された。

全体の構成、目次と執筆者を示すと次のようになる（章の副題等は省略した）。

序 年市と海港のヨーロッパ史（深沢克己）

第Ⅰ部 商人のメティエ—商業拠点のなりたち—

- 1 ライプツィヒの通商網（谷澤 毅）
- 2 アムステルダム貿易商人の内部構成
（杉浦末樹）
- 3 ナント商人の奴隷貿易（藤井真理）
- 4 ロンドン商人とイギリス海外貿易
（川分圭子）
- 5 ブリストル商人の経営構造（一柳峻夫）
- 6 イルクーツク定期市とシベリアの商品流通
（森永貴子）

第Ⅱ部 国家の枠組み—商業空間のひろがり—

- 7 スペイン王権支配下のグラナダ「王国」と
地中海交易（宮崎和夫）
- 8 オスマン帝国とヨーロッパ商人
（堀井 優）
- 9 東方問題とレヴァント貿易（松井真子）
- 10 イギリスとオランダのバルト海・白海貿易
（玉木俊明）
- 11 デンマーク王国の海上貿易（井上光子）

文献解題

みられるように、第Ⅰ部の6章は、「商業拠点のなりたち」を扱っていて、それぞれライプツィヒ、アムステルダム、ナント、ロンドン、ブリストル、イルクーツクの諸都市を拠点とした通商網、海外貿易、商品流通が論じられている。第Ⅱ部では、「国家の枠組み—商業空間のひろがり—」が、それぞれスペイン・グラナダ「王国」、オスマン帝国、イギリスのレヴァント貿易、イギリス・オランダのバルト海・白海貿易、デンマーク王国などの国々や地域の交易・貿易や商人社会のあり方が論じられる。

以下、簡潔に本書の諸章の内容、それに評者がとくに関心を有した点について触れておきたい。

序章で、編者深沢は、「長いあいだ、研究史の周縁に位置した」商業史の意義を、「国民的枠組みをこえる広域空間のなかで文明形成を考え、外部的な接触・交流をたんなる例外的で付随的な現象でなく、歴史発展の持続的で本質的な原動力とみなす視点が要求されている」ればこそ、「国際商業史」が、そうした「歴史研究に中心的位置をしめるはず」と指摘している。研究分野・方法としては、次の3つ、つまり、法制史・政策史といった、関税や貿易の制度や政策を対象とした伝統的な研究分野、第2は、マクロ・ミクロ分析による統計・計量的な狭義の経済史分野、そして第3に商業をいとなむ商人の社会史的研究分野に分類される、という。本書の第Ⅰ部、第Ⅱ部の構成からみると、第Ⅰ部は主としてこの第2、第3の分野に、第Ⅱ部は第1、第2の分野にかかわる特徴と共通性を有するとされる。

第1章では15～16世紀のライブツィヒの年市が論じられる。これまで中・東欧地域の大市・年市とその機能については学界に提供される情報が乏しかったのではないか。その点で、ライブツィヒを中核とする商業圏域が史料に即して辿られているのは評価できる。第6章では18～19世紀のイルクーツクのそれが解明されている。後者の場合、シベリアという広大な空間を対象として、ヨーロッパ、ロシア、中国までが視野に入れられる。評者には、イルクーツクからアンガラ川、ケチ・オビ・トボル・ヴォルガなどの諸河川を経てモスクワに向かう長大なシベリア・中国産品の流れが興味深かった。第Ⅰ部の他の章は海港に係わる研究で、北海・大西洋沿岸の商業都市が対象とされる。第2章は17世紀アムステルダムの能動的貿易、外国商人の定着、そこにおける開放性と流動性が解明される。外国からの移住商人が時期的に異なっていたとの指摘は新しい知見であろう。第3章はナントを対象とし、奴隷貿易に従事した商人が主要なテーマとなる。とりわけナントの奴隷貿易の特権的なメカニズム（91頁）、ナントを起点とした三角貿易が重要である。第4章ではロンドンのボディントン家の国内卸売業と外国貿易、とくにレヴァント貿易から西インド貿易への事業展開が問題となる。第5章は、ブリストル港のバルト海・イベリア半島のヨーロッパ内貿易が論じられる。商人マンクリーによる西インド砂糖の輸入と大陸への輸出がヨーロッパ内貿易と密接に関係を有して形成されていたことが指摘されている。

第Ⅱ部では、第7章でグラナダ王国の海上交易、カスティーリャ支配下における西地中海交易の実態

が対象となる。ここでは時代を通じて頑強に生き続けるジェノヴァ商人の姿が印象深い。第8章ではオスマン帝国下のエジプトのヴェネツィア商人の居留民社会と交易のあり方が論じられるが、第7章でみたジェノヴァ商人と対比されるヴェネツィアの商業活動、ユダヤ人の活動が活写されていて、評者には諸章中最も興味深いものであった。第9章は19世紀の自由貿易像がイギリスとレヴァント貿易との関わりで論じられている。特にオスマン帝国の低関税がヨーロッパ側から強制されたものでなくカピチュレーション体制の帰結としてあったという指摘は、「自由の出自」（281頁）の問題とともに今後一層研究されるべき論点であろう。第10章はイギリスとオランダの北欧貿易がロシアとの関係を中心にして明らかにされている。とりわけオランダとアルハンゲリスクの結びつきを解明したことは重要である。第11章は大国の扶間で中継貿易を展開するデンマークの貿易とその繁栄、国際商業の重層性が論じられる。華々しい大国間の覇権獲得競争に目を向けがちな国際商業戦の裏面を、専らデンマーク語文献により提示した点は高く評価できよう。

全体を読了しての印象では、ヨーロッパ史研究の高度な知的財産の厚み、文献・史料の豊富さという点である。その分、研究の進展は詳細な成果をもたらすことになる。第2に、近代国家の歴史性とでも言おうか。本書では、せいぜいのところ19世紀半ばまでの射程であるが、その後の世界を特質づける近代国家の統合・統治力の異常な凝集性を感じた。本書の対象とする時代との対比においてである。著名なJ・D・トレイシィの編集した『商人帝国の政治経済学』（J. D. Tracy, ed., *The political economy of merchant empires*, Cambridge, 1991）と比較してみたい誘惑にかられる。

若手の研究者によってヨーロッパの国際商業史に本書のような密度の高い研究書が提供されたことは高く評価できる。何よりも商業史の分野に優秀な研究者が育ちつつあることは時代状況にもよろうが、隔世の感を禁じえない。国際金融史とともに今後の研究の進展の期待できる領域である。

しかし、他方で、古文書館の史料を使用する高度で精密な研究がなされるだけに、その成果が単なる学問的成果としてだけでなく、それらがどのような歴史像を結ぼうとするのか、その成果の生かし方が問われてくるようにも思う。実証された史実が自己の歴史像の見直しにどう生かされるのか、そのことを自覚する視点を保持することが大切である。経済

史研究に限らず歴史研究の醍醐味の一つはファクト・ファインディングにあり、本書はそのことを随所で堪能させてくれる。本書はその期待に十分応えてくれる。欲を言えば、R・エーレンベルクの『フッガー家の時代』やそれを継ぐことを意識したR・カランダの著作（『カルロス5世とその銀行家たち』）のような規模雄大な歴史的視野を感じさせるなものかが欲しかったように思うが、これは欲張りというものであろう。

図版、地図も多く掲載されていて、この種の研究書としては比較的読みやすい。また、巻末の文献解題（170の文献が著作、史料集、論文を含めて掲載されている）は、このシリーズの他書にもみられるものであるが、研究状況が門外漢にとってもわかりやすく極めて有益である。

（ミネルヴァ書房、2002年5月、x+347+28頁、4,200円）